

初期マラーター王国とマンサブダーリー・システム についての覚書

末 広 朗 子

筆者は、拙稿「デカン地方出身者とムガル支配——マンサブダーリー・システムを中心に」[末広 2006]において、デカン地方における、主にデカニーと呼ばれる人々についての分析を行ったが、マラーターと呼ばれる人々についての分析が課題として残った。

従来の研究ではマンサブダールの枠の中ではマラーターは別枠扱いであるが、シヴァージー他マラーター王国からムガル側に投降した人間をアーディル・シャーヒー王国とクトゥブ・シャーヒーからムガル側に来た人間と同じデカニーとして扱う研究もあり、解釈に統一がとれていない [Habib 1999; Ali 1997; Alavi 1972; Richards 1975]¹⁾。

本稿では、史料の上で、「マラーター側からムガル側に来た (= 投降した)」という表現のある人物について取り上げることにする。その中にはシヴァージーやサンバーージーなど、初期マラーター王国の中核の人物や、ムスリムも含まれる。

史料としては、アウラングゼーブ時代のペルシア語行政史料を用いて、初期マラーター王国とムガル・マンサブダーリーシステムとの関わりを可能な限り明らかにすることを目的とする。マラーティー語史料を用いていないので、当然分析には限界があることをあらかじめ断わっておく。

分析の枠組みとしては、シヴァージーやサンバーージーら、マラーター王国の中核に当たる人間に与えられたマンサブ、シヴァージーの家臣に与えられたマンサブ、サンバーージーの家臣に与えられたマンサブの3つのカテゴリーに分けて分析することにする。

デカン地方における、特にマラーターのマンサブダールの数の急激な増加がムガルの弱体化の一因となったとされているが [小名 1993: 76; Ali 2006a: 66; Ali 1997: 26-33]、実際に彼らがどのようにムガルのマンサブダーリー・システムに取り込まれていったのかを明らかにして、ムガル朝と初期マラーター王国の関係の一端を明らかにすることが本稿の目的である。

1) ムガルのマンサブダールの基本史料である 'Arz-o-chehra (人や馬、象などの記録 [Ahmed 1977: 356]) 文書などにおいて、マラーターの出自の人間は「マラーター」と明記されるために、従来の研究者のマンサブダールの表ではマラーターは別枠にされている。しかし、マラーター王国出身者は、アーディル・シャーヒー王国出身者やクトゥブ・シャーヒー王国出身者とひとくくりに「デカニー」とされる場合もある [Richards 1975: 87; Ali 1999: 26-27; 312]。人種別でも、マラーターを Rajput Dakhni として Dakhni 枠に入れる研究者もある [Alavi 1997: 73-74]。

I マラーター王国の中枢人物とマンサブ

シヴァージー・ボンスレーの父親であるシャーハジール・ボンスレーは、アーディール・シャーヒー王国と密接な関わりがあったが、一時的にシャー・ジャハーン帝の配下に入って1630年ころには5,000 ザート、5,000 サワールのマンサブを与えられ [Ali 1985: 111], 1632~33年にも再び同じマンサブを回復されたが [Ali 1985: 121], その後逃亡した²⁾。ここでは、その子孫でマラーター王国の中枢にあたるシヴァージーやサンバージーらに与えられたマンサブについて取り上げることにする。

1 シヴァージーに与えられたマンサブ

アウラングゼーブ帝の皇子ムラード・バクシュ Murād Bakhsh は1649年8月14日にシヴァージーに手紙を送り、王に拝謁するならば、5,000 ザート 5,000 サワールのマンサブが与えられると書いた [Sarkar 1978: 106]。支配暦9年 Safar 月25日 (1666年5月) にシヴァージーはアウラングゼーブとの会見のためにアグラを訪れ、8月16日にはシヴァージーにマンサブや城を与えるように命令が出され、彼にワタン *waṭān*³⁾を戻すことが許可されたが [PSIH: VI-5], 翌日に彼はアグラから逃亡した。

支配暦10年 Rabi' al-Awwal 月11日 (1667年8月22日) には、シヴァージーは、自分に与えられた *Deshmukhī*⁴⁾に近隣の人間が妨害をしているが、自分は5,000 ザート、5,000 サワールを与えられた *khānazāda*⁵⁾であり、ジャーギールが与えられることを望むと請願した。しかし、彼は軍、州に出席していないのでジャーギールとマンサブの給与は与えられず、城から貢納金を取るよう命令が出された [PSIH: VI-84]。

2) 1649年8月14日に、皇子 Murād Bakhsh からシヴァージーに5,000 ザート 5,000 サワールのマンサブが与えられた時に、シャーハジールもマンサブを回復されたとの記述がある [Sarkar 1978: 106, Chandra 1994: 120]。Grant Duff によると、1629年にシャー・ジャハーンが6,000 ザート 5,000 サワールのマンサブとジャーギールをシャーハジールに与え、アフマドナガルにジャーギールを与えた。家臣の多くにマンサブが与えられ、いとこの Keloji Bonsle にもマンサブが与えられた [Duff 1858: 75-76]。

3) ワタンとはもともと地方の世襲の領土を指し、ジャーギールの中でも例外的に世襲的に所有される土地を意味する [Habib 1999: 547; Ali 1997: 79-80]。

4) *Deshmukh* (または *Desāi* 「郷書記」) とは、アーディール・シャーヒー王国に存在した「郡」を単位とした在地世襲役人である。在地世襲役人にはほかに、郷書記 (*Deshpānde*, *Deshkulkarnī*)、村長 (*Pātel*, *Muqaddam*)、村書記 (*Kulkarnī*)、市場の長 (*Seṭe*)、市場の書記 (*Mahājan*)、城塞の警備員 (*Nāikwāḍī*) などがある [深沢 1972: 9, 37-41]。*Deshmukhī* とは *Deshmukh* の職と権利とそれに付随する取り分を指すが、[Habib 1999: 524; Willson 1885: 132], マラーター王国において得分権として売買されていたことは小谷氏の研究に詳しい [小谷 1989]。

5) *Khānazāda* とは、代々ムガルに仕えている家系に属するものである [Habib 1991: 531]。Athal Ali によると、*khānazāda* はアウラングゼーブ時代に州総督 (*ṣūbadār*) に任命される場合が多く、高位のマンサブダールの4割以上を占めていたという [Ali 2006b: 265]。

シヴァージーには額としてはかなり高いマンサブが与えられていたが、逃亡を繰り返したり、給与が与えられなかった記述から、どの程度実行されていたかには疑問が残る⁶⁾。しかし、ジャーギールや Deshmukhī と与えられている点や、シャーハージーの代から仕えているということで khānazāda という表現がされている点は興味深い。

2 サンバージーおよび息子たちに与えられたマンサブ

支配暦 10 年 Dhū al-Qa'da 月 8 日 (1667 年 4 月 22 日)、サンバージーは、400 騎をつれてムガルに仕えていたが、シヴァージーは息子にマンサブを与えるように請願をした [PSIH: VI-50]⁷⁾。同年 Rabī 'al-Ākhira 月 24 日 (同年 8 月 3 日) に、シヴァージーは再び請願を行って、サンバージーは以前 5,000 ザート 5,000 サワールのマンサブを与えられている khānazāda であるが、給与 (tankhāh⁸⁾) がないので、ジャーギールを与えるように請願した。その後、サンバージーのマンサブを戻し、ジャーギールを戻すように命令が出された [PSIH: VI-99]。

支配暦 11 年 (AH1079 年) Rabī'al-thānī 月 12 日 (1668 年 9 月 9 日) にも、サンバージーのマンサブに関して、5,000 ザート、5,000 サワール、do aspa se aspa⁹⁾6 月¹⁰⁾ chauthāī 免除¹¹⁾ という記述がある (SDA, 66-67)。

その後、サンバージーには 7,000 ザート 7,000 サワールのマンサブが与えられたが、彼は後日ムガルの元から離反してマラーター側に戻ったという報告が 1671 年 12 月 15 日にある [PSIH: VI-133]¹²⁾。

サンバージーの息子のシャーフーは、支配暦 33 年 (AH1101) Šafar 月 2 日 (1689 年 11 月 5 日) には 7,000 ザート 7,000 サワールのマンサブを与えられ、そして他のデカン勢力と同様、6 ヶ月、chauthāī 免除、証人免除¹³⁾ などの好条件が与えられた [SDA: 215-6]。その

6) シヴァージーは 1674 年 6 月 5 日にラーイガドで王座についた [Sardesai 1986: 219]。

7) シヴァージーはマンサブが与えられないならサンバージーは 400 騎を連れずに伺候すると請願している。

8) tankhāh とは俸禄のことを指す [近藤 2003: 490]。

9) Do aspa se aspa (ド・アスパ、セ・アスパ位) とは、ザート数、サワール数を動かさずに、サワール数のみ増減できる方法である [小名 1993: 68-69]。

10) 6 月とは月額表示法のことであり、帳簿上確定した額の何分の一をマンサブダールの額にするか、月額で示す方法である [小名 1993: 69]。

11) シャー・ジャハーン時代には、デカン地方にジャーギールをもつものの給与は 1/4 を削減され (chauthāī kul)、その後アウラングゼーブ治世 11 年に、アーディル・シャーヒー王国及びクトゥブ・シャーヒー王国から来たマンサブダールの給与の 1/4 を差し引く (waḍā'ī chauthāī) という政策が定められた [Habib 1985: 223; 深沢 1973b: 109; 小名 1993: 70; Ali 1997: 27]。

12) サンバージーは 1679 年 11 月 20 日にムガル帝国軍のディレイル・ハーンの下から逃走し、シヴァージーの死後 1680 年 7 月 20 日に王座についたが、1689 年 3 月 1 日にアウラングゼーブによって処刑された [Sardesai 1986: 262, 303-4, 325-6]。

13) 月額表示法、chauthāī については注 11 を参照。デカンの人間はマンサブダールの証人を免除された [Ali 1997: 60-61]。

22 日後には彼はジャーギールを与えられて、証人を免除された [SDA: 216-7]。シャーフーの別の息子であるマンシング Mansinga にも、6,000 ザート、1,000 サワールなどの高位のマンサブが与えられた [SDA: 215-6]。

上記のようにサンバージーにはシヴァージーの請願によりジャーギールや給与が与えられた点や、シヴァージーやサンバージーが自分を khānazāda と表現していた点は興味深い。シャーフーの時代から他のデカン勢力より優遇されて、6ヶ月、chauthāī 免除、証人免除などの条件が与えられ、マンサブの額もかなり大きなものであった。

今までに見てきたマンサブは、マラーター王国のいわば王族にあたる人物がムガル側に投降した場合であり、高位のマンサブが与えられるのはむしろ当然と考えられるが、次ではマラーター王国の家臣であった者が離反してムガルに仕官を希望したケースについて見ることにする。

II シヴァージーの家臣とマンサブ

1 シヴァージーの家臣とムガル支配者

ここでは、「シヴァージーの家臣であった」または「シヴァージーの国から来た」と明記されている人物について取り上げることとする。

1667年10月10日にはムハンマド・クリー Muḥammad Qulī¹⁴⁾ という武将が、シヴァージーの家臣のコンコージー Kokōjī という人物について、ファウジュダールのもとに拘束されているが、良い兵士であると報告した。彼の報告に従って、拘束から解放し、200 ルピーエを与えて、連れてくるように命令が出された [PSIH: VI-105]。同人物には、シヴァージーの家臣をすべて解放して彼にゆだねるようにとの命令が出された [PSIH: VI-49]。

1667年10月10日には、皇子ムハンマド・モアッザム Muḥammad Mu‘azzam がシヴァー（ジー）の家臣のソバーン・シン Sobhān Singh とビール・バーン Bīr Bhān を解放するよう請願したときには、二人を解放するように命令が出された [PSIH: VI-102]。

このように、シヴァージー側の人間が投降した場合には、その人物についての報告が上に行き、それにしたがって指示が出されていた。

2 シヴァージーの家臣とマンサブ

支配暦3年 AH1070年 Dhū al-Hijja 月26日（1660年8月17日）には、スバンジー・カーンカル Subhānjī Kānkar、スレージー Surējī、スリー・ラオ Surī Rao、バガット・シン Bhagat Singh、マナージー Manhājī らの人物にそれぞれ300 ザート 200 サワール、250 ザー

14) 彼自身も、もともとネトージー・パーレカル Netōjī Pālekar と呼ばれるマラーターの武将であったが、ムガル側について改宗し、5,000 ザートのマンサブを与えられたが、のちに再びシヴァージーのもとに戻り、ヒンドゥーに再改宗した [Ali 1997: 179; Sardesai 1986: 199, 227]。

ト 100 サワール, 250 ザート 60 サワール, 250 ザート 10 サワール, 250 ザートのマンサブが与えられている。それぞれ「シヴァージーの国の人間のジャーギールダールのマンサブ」として与えられているが、具体的にどのような条件であったかは不明である [SDA: 6]¹⁵⁾。

支配暦 3 年 AH1071 年 Sha'bân 月 11 日 (1660 年 8 月 17 日) には、マナージー Manhâjī, シャンカル Shankar¹⁶⁾, アダム・ハーン Adam Khân の息子シャード Shād, ムハンマド・バーキー・ハーン Muḥammad Bâqī Khân の息子ファテフ Fateḥ, ナロー・パンディット Narō Pandit らは、シヴァー (ジー) の国から来て、マンサブが与えられ、更にテリンガナに任命された。その中に 2 名のムスリムが含まれていること、シャンカル Shankar がのちに改宗したことは興味深い [SDA: 16-7]。

支配暦 5 年 AH1072 年 Dhū al-Qa'da 月 20 日 (1662 年 7 月 27 日) に、サンバージー Sambhâjī には 800 ザート, 400 サワール, ジャーノジー Jānojī には 300 ザート 50 サワールのマンサブが、シヴァー (ジー) の国のジャーギールダールという条件で与えられた事例がある [SDA: 34-5]¹⁷⁾。

支配暦 12 年 Rajab 月 21 日 (1669 年 12 月 5 日) には、シヴァージー・デカニー Shivâjī Dekhanī の兄弟とされる、ソバーン・ジェーオ Sobhân Jēo, ナロー・ジェーオ Narō Jēo, ベイオージー Beiōjī, タジュー・ジェーオ Tajū Jēo らに、1,000 ザート 500 サワールという高額のマンサブが与えられたが、のちに彼らはムガルの元を離反して逃亡した [SDA: 109]。シヴァージー・デカニーという人物がどのような人物であるかは不明であるが、かなりのマンサブを与えられても、離反している点は興味深い。

また、1676 年 9 月 23 日に、ランゴージー・コール・ラオ Ranghōjī Kōr Rao, ハリー・パンディット Harī Pandit, アンバージー Anbâjī, ゴーパルジー Gōpaljī らの人物にそれぞれ 1,000 ザート 500 サワール, 300 ザート 80 サワール, 300 ザート 40 サワール, 100 ザート 30 サワールのマンサブがそれぞれ与えられたが、ランゴージーには、4ヶ月, chanthāī 免除という条件が認められた。更に「古い国のジャーギールを認める」という表現が付与されていたことから、旧領土にもジャーギールがある程度は認められていたと考えられる [SDA: 107]。

ブルハーン Burhân の息子のアリー 'Ali は以前シヴァー (ジー) の家臣であったが、新しい国 (mulk-e nau) と一村の条件で、300 ザート, 50 サワールを認められた (SDA, 35)¹⁸⁾。

15) ほかにシヴァー (ジー) の国のジャーギールダールの条件で 2,000 人を許可したとの記述がある。

16) 彼は「新しくムスリムになった nau muslim」との記述があるので、のちに改宗したことが分かる。

17) また、ティムール・ベグ Timūr Beg の息子ムハンマド・シャリーフ Muḥammad Sharif がゴルコンダから来た時には、300 ザート 100 サワールがシヴァー (ジー) の国のマンサブダールの条件で与えられた。

18) このほかに、タルコーカンに任命されたハリー Hari に関する記述があるが、マンサブに関しては不明である (SDA, 4)。

シヴァージーの家臣がムガル側に恭順を示した場合、ムガル側としてはある程度の条件を与えて受け入れていたと考えられる。ムハンマド・クリーのようにマラーターから改宗した人間をその任務に充てるなどした。マンサブの額も少なく、その事例もあまり多くはないが、4ヶ月、chauthāī 免除という条件を与えられている点や、ジャーギールという明記がある点は興味深い。しかし、シヴァー（ジー）の国のジャーギールや、古い国ののジャーギールが具体的にどのようなものであったかは不明である。

Ⅲ サンバーギーの家臣とマンサブ

サンバーギーの処刑前後の時期は、マラーター王国の危機の時代であった。この時期には、先述したマラーター王国の中枢の人物のほかにも、シヴァージーやサンバーギーの身内にあたる人間もムガル側の恭順を求め、勅令を求めてかなり高い待遇を求めていた。

支配暦 24 年 Rabi' al-Āhira 月 9 日 (1681 年 4 月 19 日) には、シヴァージーの兄弟マンコーギー Mankōji がムガルからデカンに任命されて困窮して駄獣のエサ代の免除を求めたという記述があり [PSIH: VI-192]。支配暦 26 年 Muḥarram 月 15 日 (1683 年 2 月 4 日) には、サンバーギーの叔父のアンコーギー Ankōji が困窮してビージャープルに 4,000 騎を連れて居住しているが、保証書 (qawl) と皇帝の手形 (panja)¹⁹⁾ が与えられるならば、御前に来ると申し出た事例がある [PSIH: VI-401]²⁰⁾。

シヴァージーやサンバーギーの身内に当たる人物が、自ら勅令を求めて恭順を申し出る程であったので、当然サンバーギーの家臣の離反は頻繁に起こった。

Ⅰ サンバーギーの家臣の離反

支配暦 26 年 Rabi' al-Awwal 月 16 日 (1683 年 4 月 4 日) には、サンバーギーとアーディル・シャーヒー王国側の人々が頼ってきたら、慰安を与えて、報告するように命令が出された [PSIH: VI-464]。

支配暦 28 年 Dhū al-Qa'da 月 26 日 (1684 年 11 月 24 日) には、バラマティー Barāmātī のターナダールのアマーヌッラー・ハーン Amanullāh Khān に対して、サンバーギー側の人間が頼ってくるなら 2,000 騎を家臣にするように命令が出された [PSIH: VI-517]。

支配暦 27 年 Muḥarram 月 24 日 (1684 年 1 月 2 日) にはハーン・ジャハーン・バハドゥル Khān-i-Jahān Bahādur²¹⁾ が、サンバーギーのほとんどの家臣が来ているが、勅令

19) Panja とは皇帝の手形である [近藤 2003: 494]。

20) その後、彼の名で賜衣と勅令を与えるように命令が出された。

21) ハーン・ジャハーン・バハドゥルとは、Khān Jahān Bahādur Zafar Jang Kōkaltash Umdat ul-Mulk であり、アウラングゼーブ時代に 7,000 サート 7,000 サワール (6,000 do aspa se aspa) のマンサブを与えられた [Ali 1995: 175; TM, 177-8]。

をコートワルが渡さないと訴えたので、印を押した dastak²²⁾を与えるように命令が出された [PSIH: VI-470]。

支配暦 28 年 Safar 月 11 日 (1685 年 1 月 7 日) にはサイド・ウガン Saiyid 'Ughân が、サンバージー側の人間が敵を捕らえてきて、その代官がハーン・ジャハーン・バハードゥルのもとに来ているという報告をしたので、それらの人物を御前に連れてくるように命令が出された [PSIH: VI-542]。

カラ・ナムジュナ Kara Namjuna ターナでは、バーバージー Bābājī と騎兵 200 騎、パルスージ Parsūjī と 150 騎が奉仕を望んできたとのアシュラフ・ハーン Ashraf Khān の報告があった²³⁾ [PSIH: VI-545]。

ターナダールやムガルの将軍の報告からわかるように、サンバージーの家臣の離反は頻繁であった。1685 年にも、サンバージーの家臣を 2000 騎まで雇えという命令が出されているほどである [PSIH: VI-594]。以上の事例を踏まえて考えると、サンバージーの家臣がそのままムガル側に登用されたわけではなく、まずはムガル側の将軍から報告がなされ、その上から指示が出されるのが流れであったと考えられる。

2 サンバージーの家臣とムガル支配者

実際に騎兵を引き連れてムガル側に投降したマラーターの家臣に対してムガル支配者はどのような対応をしたのか、以下に紹介する。

支配暦 32 年 (AH1100 年) Rabī' al-Awwal 月 4 日 (1688 年 12 月 27 日) に、ゴパール・ラオ Gōpal Rao という人物が 5000 騎を連れて保証書を求めた場合には、彼にそれを与えて御前に呼ぶように命じられたが、裏書には、任命なしにマンサブは与えないように書かれた [SDA: 141]。

そのほか、400 人の歩兵の将軍のラーヤジ Rāyajī, ゴーヴィンド・ラオ Gōvind Rao, らがサンバージーのもとから来た場合にも、御前に送るように命令が出された [PSIH: VI-569, 562]。支配暦 27 年 Sha'bān 月 24 日 (1684 年 7 月 28 日) にヤクープ Ya'aqūb という人物がサンバージーの家臣 25 騎を捕縛した際には、彼をファダーイ・ハーン Fadāi Khān に送るように命令が出された [PSIH: VI-488]。

支配暦 28 年 Shawwāl 月 29 日 (1684 年 9 月 29 日) ハーン・ジャハーン・バハードゥルに対しては、サンバージーの家臣でムガル側に来たものには、マンサブとをジャーギールを与えるまでに日給を支払うために、5,000 ルピーを与えるように命じた。また、彼のもとに

22) dastak とは許可証のことである [近藤 2003: 563]。

23) 同じ史料には、Mehtāj al-Fateh 城から、ラーマジー Rāmājī, ゴーヴィンド・ラオ Gōvind Rao らが投降したとの記述がある (PSIH, VI-545)。ラーマジーは馬と衣を贈った。同じ城からは、ラーヤジ Rāyajī はか二人のサンバージーの家臣が、50 頭の家畜を連れてきたという記述がある [PSIH: VI-593]。

5,000 騎のシヴァージーの家臣が来て、馬や罰金の免除を要求した場合には、それに応じるように命じている [PSIH: VI-494]。

支配暦 28 年 Šafar 月 26 日 (1685 年 1 月 22 日) には、サンバージーの家臣であるダナージー Dhanāji, キシャン・ラオ Kishan Rao, バグワント・ラオ Bhagwant Rao, メワージー Mewāji, ランガージー Rangāji が、シャー・アーラムの認可により、新しく雇われたとの記述がある [PSIH: VI-554]。

支配暦 28 年 Dhū al-Qa'da 月 20 日 (1684 年 8 月 20 日) には、アマーヌッラー・ハーン Amanullāh Khān が、マスナド・ラオ Masnad Rao, マロージー Malōji, バフマーンジー Bahmānji, アヌージー Anūji らを任命したとの記述がある [PSIH: VI, 504]。

1685 年 1 月 29 日にサンバージーの家臣のムスリム、マリク・ベグ Malik Beg とムハンマド・フサイン Muḥammad Ḥusain が、シヴァージーの国から来ることが困難であると請願した際には、援助の資金を与えるように命令が出された [PSIH: VI-558]。

同年 1 月 12 日には、ルーフッラー・ハーン Rūhullāh Khān に対して、サンバージーの集団が奉仕することを望んで来たら、マンサブとサルダールのジャーギールとして何ルピーカを、国庫から支払うように命令が出された [PSIH: VI-545]。

支配暦 28 年 Sha'bān 月 24 日 (1684 年 9 月 24 日) には、バドルージー Badhurūji が、ラード・アンダーズ・ハーン Ra'ad Andāz Khān の保証書によって奉仕を望みできたので、マンサブを決定するまで月給を払うように命令が出された [PSIH: VI-492]。

このように、サンバージー側の人間が奉仕を求めた場合には、すぐにマンサブが与えられたわけではないが、まずは御前に呼び、困窮した人物には資金を送るなど、柔軟な対応があったことがわかる。ムガル側の将軍などの紹介によってムガルに投降する事例もあった。

投降した人物に、賜衣 (khil'at) が与えられる事例もあったが [PSIH: VI, 516, 593], 逆にマラーター側の人間が貢物として金貨をムガル側に送る事例もあった [PSIH: VI-360, 399, 543]。

3 サンバージーの家臣とマンサブ

1685 年 3 月 22 日にダワーンジー Dawānji という人物は、皇子シャー・アーラムの許可により 1,000 ザート 700 サワールを与えられていたが、のちに拝謁してさらに 400 ザート, 200 サワールを与えられた [PSIH: VI-587]。支配暦 27 年 Sha'bān 月 27 日 (1684 年 8 月 2 日) には、プラシャント Prashant という人物も、皇子アザム・シャーの許可により、1,500 ザート 1,000 サワールを与えられた [PSIH: VI-491]。

また、先述したハーン・ジャハーン・バハードゥルの紹介によってマンサブを与えられた人物もあった。支配暦 27 年 Muḥarrām 月 4 日 (1684 年 1 月 2 日) にサンバージーの大敵パトリー・ラオ Patrī Rao が彼の紹介により拝謁した場合には、500 ザート, 300 サワールと賜衣が与えられ、さらに勅令と、panja (皇帝の手形) のついた書類を彼に与えるように

命令が出された [PSIH: VI-470]。同年 Muharramn 月 30 日 (1 月 8 日) に、ソバーンジー Sobhānī ほかサンバージーの家臣が彼のもとに慰安を求めて来た際には、ソバーンジーに 1,500 ザート、500 サワール、ディオージー Dēōjī に 500 ザート 200 サワールが認められ、のちに彼らは御前に送られた [PSIH: VI-475]。

1685 年 2 月 26 日には、ナゴジー Nagōjī の息子ゴーヴィンド Gōvind に 300 ザート 100 サワールのマンサブが与えられた [PSIH: VI-570]。また、サンバージーの家臣のラーム ラーイ Rām Rāi には 1,000 ザート 800 サワール do aspa se aspa のマンサブが与えられていたが、困窮していたので援助金を与えるようにとの命令が出された [PSIH: VI-426]。

1683 年 2 月 8 日に、ラーガル・カローカ Rāghar Kharōka なる人物が、マンサブを与えてくれるならばサンバージーのトリンバク Trimbak 城を与えると申し出たため 700 ザート 200 サワールが彼に与えられたが、城主が同意せず、城を引き渡すことができなかったので、彼は逃亡した。その結果、彼の部下と思われる、400 ザート、100 サワールのジャムナー ジー Jamnājī が拘束されたが、のちに解放された [PSIH: VI-429]。

サンバージーの家臣にはムスリムも含まれた。カーディー・ジャハーン Qāḍī Jahān とカーディー・ラーヘリー Qāḍī Rāherī はもともとサンバージーの書記であったが、1683 年 3 月 28 日ムガル側に来て [PSIH: VI-457]、支配暦 26 年 1683 年 Rabī'al-Awwal 月 19 日 (1683 年 4 月 7 日) に 5 枚の金貨と 18,000 ルピーを皇帝に贈り [PSIH: VI-458]、敵国に関する質問に答えて御前に伺候するよう命じられ [PSIH: VI-459]、1,000 ザート 1,000 サワールを与えられた [PSIH: VI-465]。

ほかにも、マリク・ベグ Malik Beg とムハンマド・フサイン Muḥammad Ḥusain は奉仕を望んできたが、シヴァー (ジー) の国から軍隊を連れてくるのが不可能であったので、困窮しているとの記述がある [PSIH: VI-558]。ワジール・ハーン Wazīr Khān の孫、ムハンマド・アクバル Muḥammad Akbar の息子のムハンマド・アービド Muḥammad 'Ābid はサンバージーの家臣であったが、伺候して贈り物を贈り、賜衣を与えられた [PSIH: VI-577]。

カーディー・ハイダール Qāḍī Haydar という人物は、ラアル・ベグ La'al Beg の息子マリク・ベグ Malik Beg が 1,000 騎のムスリムを連れて奉仕をのぞみ、他にシャイフ・フサイン Shaikh Husain が奉仕を望んだことを報告をした。のちに、彼に二人を御前に連れてくるように命令が出された [PSIH: VI-505]。サンバージーの家臣のカンドージー Khandōjī も、同じ人物の紹介によって任命され、1,000 ザート、500 サワールが与えられた [PSIH: VI-492]。

支配暦 26 年 Ramazān 月 24 日 (1682 年 9 月 17 日) には、プラムガダ Pramgada のある人物について、良い兵士であり、マンサブや王の仕事が与えられることを望んでいるとハーン・ジャハーン・バハードゥルに報告があったので、彼の望みに従ってムスリムにするように命令が出された [PSIH: VI-315]²⁴⁾。

24) 支配暦 23 年 Dhū al- Hija 月 24 日 (1682 年 12 月 14 日) 付のスーラトの代官の報告からは、サ

このようにマンサブを与える場合には、皇子によって与えられる場合、ハーン・ジャハーン・バハードゥルのような将軍を介して与えられる場合などがあった。しかしサンバージーの家臣の投降の記述が非常に多いのに比べてマンサブに関する記述は少なく、安易にマンサブが乱発されていたとは考え難い。むしろ、先に述べたように、まずいくらかの資金を国庫から支払ってそののちしかるべき手段を踏んで与えられたと考えるのが妥当と思われる。逆にマラーター王国側の人間が一定の条件と引き換えにマンサブを要求していた事実は興味深い。

マラーター王国からムスリムの将軍などがムガルへ恭順を示す例もあり、ムスリムの人物を介してサンバージーの家臣がムガルに恭順を示す場合もあった。改宗が有利に働いたかどうかは慎重に検討すべき問題である。

おわりに

以上の分析を簡単にまとめると以下ようになる。

- (1) シヴァージーやサンバージーら、マラーター王国の中枢に位置する人間も、政情の変化に応じてムガル側に投降し、かなり高位で好条件のマンサブを与えられた。
- (2) シヴァージーの時代にはマラーターからムガル側に恭順を示すものは受け入れられ、ムハンマド・クリーなどにその任務が任され、投降はある程度奨励されていたものと考えられる。
- (3) シヴァージーの家臣でムガルに投降した人物のマンサブは額はあまり大きくないが、chauthā'i の免除があったり、「ジャーギール」という表現があるなど、ある程度の待遇はされていたと考えられる。
- (4) サンバージーの時代には、政情の変化に応じて、将軍やターナダールの記述にあるようにマラーターから大規模な離反があった。彼らはまず当地の将軍のもとに恭順を示し、その後上からの命令に従って処置されていたと考えられる。
- (5) サンバージーの支配期には、家臣の多くがムガル側に投降したが、マンサブは安易に与えられていたわけではなく、御前に呼んだり、将軍や皇子の推薦などが必要であった。その中にはムスリムも含まれ、ヒन्दウーが改宗する場合もあった。

事例は少ないが、このような細かい分析を積み重ねていくことなしには、ムガルの膨大なマンサブダーリー・システムにおけるマラーターと呼ばれる人々の姿を明らかにすることは困難なのではないかと考えられる。

従来の研究のように詳細にマンサブの表をつくることはもちろん非常に重要であるが、二

↳ サンバージーの家臣の45人のうち、改宗したもの以外の10人は殺して、サンバージーの将軍とともに、御前に送るように命令が出されたことがわかる [PSIH: VI-384]。

つの国家間にどのようなやり取りが行われたか、どのような人物が二国間で揺れ動いていたのかなどの事柄を明らかにするためにも、さらに多くの史料の分析、マラーティー語史料の分析が急務であると考えられる。

参考文献

- PSIH: G. H. Khare ed., *Persian Sources of Indian History*, 6 vols, Bhārat Itihās Sanshodak Mandal, Pune, 1934-1973.
- SDA: Yusuf Husain Khan ed., *Selected Documents of Aurangzeb's Reign*, Hyderabad, 1959.
- TM: Kewal Ram, *Tadhikirat al-umara*, 2 vols, Ed. By Moinul Haq and Ansar Zahid Husain, Pakistan Historical Society, Karachi, 1986.
- Alavi, Rafi Ahmad (1972) New Light on Mughal Cavalry, *Medieval India- A Miscellany*, II, Aligarh.
- Ali, M. Athar (1997) *The Mughal Nobility under Aurangzeb*, Revised Edition, Oxford University Press.
- Ali, M. Athar (1985) *The Apparatus of Empire, Awards of Ranks, Offices, and Titles to the Mughal Nobility (1574-1658)*, Oxford University Press, New Delhi, 1985.
- Ali, M. Athar (2006a) Towards an Interpretation of the Mughal Empire, *Mughal India- Studies in Polity, Ideas, Society, and Culture*, Oxford University Press, Delhi.
- Ali, M. Athar (2006b) Provincial Governors Under Aurangzeb, *Mughal India- Studies in Polity, Ideas, Society, and Culture*, Oxford University Press, Delhi.
- Ahmed, Ziauddin (ed.) (1977) *Mughal Archives- A Descriptive Catalogue of the documents pertaining to the reign of SHAH JAHAN (1628-1658) Vol. I- Durbar papers and a miscellany of singular documents*, State Archives, Government of Andhra Pradesh, Hyderabad.
- Chandra, Satish (1994) *Mughal Religious Policies, the Rajputs and the Deccan*, New Delhi.
- Duff, Grant (1858) *History of the Mahrathas*, vol. 1, Reprinted by Karan Publications, 2000, Delhi.
- Habib, Irfan (1985) Mansab Salary Scales under Jahagir and Shahjahan IC 59 (3).
- Habib, Irfan (1999) *The Agrarian System of Mughal India, 1556-1707*, Second revised Edition, Oxford University Press, New Delhi.
- Richards, J. F. (1975) *Mughal Administration in Golconda*, Oxford University Press, London.
- Sardesai, Govind Sakharam (1986) *New History of the Marathas, vol.1- Shivaji and His line*, Second Edition, Munshiram Manoharlal, New Delhi.
- Sarkar, Jadunath (1978) *House of Shivaji — Studies and Documents of Maratha History: Royal Period*, Orient Longman, Delhi.
- Willson, H. H. (1885) *A Glossary of Judicial and Revenue Terms and of useful words occurring in Official Documents relating to the Administration of the Government of British India*, Reprinted in 1997, Delhi.

- 小名康之 (1993) ムガル帝国の支配体制 —— マンサブダーリー制 —— 『中世史講座 4 —— 中世の法と権力』 学生社.
- 近藤 治 (2003) ムガル朝時代の文書行政 『ムガル朝インド史の研究』 京都大学出版会.
- 末広朗子 (2006) ムガル支配下のデカン地方におけるザミンダール階層 『西南アジア研究』 64.
- 深沢 宏 (1973a) アーディル・シャーヒー王国 (西暦 1489-1686 年) の地方支配に関する一研究 『インド社会経済史研究』 東洋経済新報社.
- 深沢 宏 (1973b) 17 世紀デカン地方におけるムガル帝国の支配 —— 特に官職知行制度とその荒廃 —— 『インド社会経済史研究』 東洋経済新報社.

(本会会員)